

楠山正雄のアンデルセン翻訳（下）

——『雪の女王』の新旧版の比較——

南 菜 緒

はじめに

本論

大正・昭和期の児童文学の発展に貢献した楠山正雄は、生涯に渡ってアンデルセン童話に傾倒していた。既稿の「楠山正雄のアンデルセン翻訳—全集の新旧版の比較—」では、そのアンデルセン全集の新旧版を比較し、楠山の翻訳に対する意識の違いについて述べたが、本論文ではそれを踏まえて、作品内容の変化を見ていきたい。そこで、全集の中の一作品で、アンデルセンの代表作の一つでもある長編『雪の女王』に注目し、その新旧版を比較する。

『雪の女王』の比較に際しては、楠山のアンデルセン翻訳の最初の全集である『アンデルセン童話全集』第一巻（新潮、一九二四年）に収められたものと、晩年の『新訳アンデルセン童話集』第一巻、第二巻（同和春秋、一九五五年）に収められたものについて、以降は前者を「旧訳」、後者を「新訳」として扱っていく。既稿の場合と同じく、新訳を中心とし、新訳のうち遺稿を加えた第三巻は比較の対象外とする。また、考察するにあたって作成した比較表を資料編として一部記載した。

『雪の女王』はアンデルセンが一八四四年に書いた長編童話で、楠山も新訳の解題で「長大かつ雄大な傑作のひとつ。」と述べているように、アンデルセンの代表的な作品のうちのひとつである。まずはあらずじを簡単に説明しておく。

あるところにカイという少年とゲルダという少女がいた。二人はとも仲良しだったが、ある時悪魔の作った鏡のかけらがカイの目と心臓に刺さって以来、カイの性格は一変する。さらにある雪の日、一人でソリ遊びをしていたカイを雪の女王が連れ去ってしまった。春になり、ゲルダはカイを探す旅に出た。魔法使いのおばあさんに捕まったり、おいはぎに襲われたりと、様々な困難に見舞われながらも、王子と女王やおいはぎの娘、異国の女たちに助けられ、また花や動物たちの声に耳を傾けながら、ゲルダはついに雪の女王の宮殿までたどり着く。カイを見つけて流したゲルダの温かい涙が鏡のかけらを溶かし、カイは元の優しさを取り戻すことができた。そして二人は、手を取り故郷へと帰っていった。

この『雪の女王』について、比較表を作成し、新旧の違いについての考察を試みた。比較表では新訳と旧訳の本文を抜き出し、改訳による変化をA～Fの六種類に分類して、その部分をそれぞれ次のように表記した。新訳で新たに追加されたものは分類Aとして斜体で示し、反対に削除されたものは分類Bとして旧訳のその部分を【】で囲って示した。また、ニュアンスの違いがみられるものは分類Cとして下線を引き、単語が異なっているものは分類Dとして太字にした。さらに、文節の順序が違っていたり、一文が二文になっていたりするなど、内容は変わらないが文の作りが変化しているものは、分類Eとして二重線を引いた。これらA～Eに当てはまらない場合や、変化が大きい場合は分類Fとし、※印で囲んで示した。以上六種類の分類表記を本文の抜き出しに加え、分類欄に分類名A～Fを入れた。さらに考察欄を設け、必要に応じて論者による考察を述べた。また、本文の頁数・行数は中心とする新訳のものを用いた。

旧漢字が新漢字に、漢字が平仮名に直されている部分が全体的に多いため、今回はそれらについては部分的には指摘せず、またルビの有無についても特に言及しないでおく。また、読点の追加も多いため、一文の中で読点の追加以外の変化がないものについては便宜上省略した。

既稿で述べたが、訳者の楠山自身が、新訳はデンマーク語の原語版を、旧訳はドイツ語版二種・アメリカ版・イギリス版を底本として用いたことを全集のまえがき等で示しており、両者を比較することにあたって底本の違いは明白である。そこで細かい部分でなく、作品の内容に注目した考察を心掛け、新旧での楠山の解釈の違いを重視し、特に主題や人物に関わる変化に注目していく。

『雪の女王』は「第一のお話」～「第七のお話」の七つの章で成り立っているため、以下ではその章ごとくに、比較表を基に新旧の違いを分析していきたい。また、本文の引用については、引用中の会話文の「」と区別するため、便宜上全て◇で括弧して示し、斜体等を比較表と同じように表記した。比較表の例として、最も重要な「第七のお話」のみを資料編に付しておく。

第一のお話 鏡とのかげらのこと

〈第一のお話〉は他の章と比べて短めであるが、注目すべき点はいくつかある。まず文章全体についてだが、改訳後は平仮名や読点が多く、子どもに読みやすい書き方となっている。基本的には旧訳が簡潔な文章、新訳は長めの物語口調な文章になっていることが多く、これは〈第一のお話〉に限らず、以降全体的にも言えることである。また、分類Eにあたる、文の組立てが違うものも割とあり、その点だけで文全体の印象に変化を与えている場合も多い。

次に内容の変化を見てみると、〈鏡〉とその〈かげら〉に関する描写に細かいニュアンスの違いが多く、新旧で微妙なズレが感じられる。例えば〈鏡のかげら〉の〈窓ガラス〉から〈お友だち〉をのぞくとうなるかという点は、新訳の一五頁一四行目では〈まるでだめでした〉となっており、それ以前の〈鏡〉の映し方に関する描写も影響して「全く映らない」ように取れるが、旧訳の同じ箇所では〈たいへんでした〉とあり、こちらは「醜く映る」という印象を与えている。

また、〈悪魔〉像の違いも興味深い。新訳一一四頁八行目では、〈改行〉「こりやおもしろいな。」と、その悪魔はいいました。」とあるが、

この部分は旧訳では「こりやあ面白いなど、その悪魔は思ひました。」であり、地の文だった悪魔の思ひが、改訳後は実際に言った言葉となつてゐる。

新訳一—四頁一〇行目の「じぶんながら、こいつはうまい發明だわいと、ついわらいださずには、いられませんでした。」と、旧訳の「自分ながら、こいつはうまい發明」をしたもの「だわいと、目を細くして笑ひました。」との違いも大きい。旧訳が単なる様子描写であるのに対し、新訳では「悪魔」の心の動きに注目しており、「悪魔」の様子がよく伝わつて目に浮かぶようである。

このように「悪魔」をストーリーの一部として地の文で進めている旧訳と違い、新訳では登場人物として独立させ、その感情の動きをより豊かに表現している。旧訳では物語を進める上での一つの要素でしかなかつた「悪魔」が、改訳によつて新しく息吹を吹き込まれたかのようなのである。

第二のお話 男の子と女の子

文章の書き方については、「第一のお話」と同じく改訳後に文が長くなつてゐるものも多いが、一方で、旧訳で説明として補足的に書かれてゐる部分について、新訳では省略してゐるということも多くある。省略によつて簡潔になり、文章が分かりやすくなつてゐる。また新訳では「ダッシュ」が多用され、その後に続く部分に重みを置いたり、前の部分の余韻を残すなどの役割を果たしてゐる。ダッシュの多用は、「第三のお話」以降も続く。

また、会話文については、旧訳の「内の台詞が少し長めの場合、新訳では」を二つに分けて書かれてゐる。つまり旧訳で「…。」

と〇〇は言ひました。」となつてゐるものが、新訳では「…。」と〇〇は言ひました。「…。」という形になつてゐるのである。この点も「第三のお話」以降も続いていくが、この変化により、誰が言つた台詞であるかが早めに分かるので読みやすくなつてゐる。

次に単語やニュアンスの違いだが、興味深いのは、旧訳での「キッス」という表現が新訳で全て「ほおずり」に変わつてゐる点である。「キッス」と「ほおずり」とでは温かな優しいイメージは変わらないものの、行為自体もその雰囲気も大きく変わつてゐる。

また、「野菜」、「月」が改訳後「お野菜」、「お日さま」、「お月さま」になり、童話らしい丁寧な言葉遣いがみられる。このように単語に「お」が付くものはこの章以降も多く見られる。

また、分類Fにあたる新旧で全く表現の違うものうち、旧訳が誤訳であると考えられるものがあつた。新訳二二五頁一五行目の「※ふとその雪のにわとりが、両がわにとびたちました。※」が旧訳では「※急にその見知らぬ人とカイは側に飛び下りました。※」となつてゐる部分である。旧訳は重訳なので、底本から誤訳になつてゐるのか楠山が間違えたのかどうかは不明だが、文脈から考えて、旧訳は指示語の指すものを誤つて訳したのではないかと思われる。

分類Fに関してはこの他、新訳二二一頁七行目で子どもたちが一緒に歌う「さんび歌」が気になる。新訳では「(一行空き・三行下) ※ばらのはな さきてはちりぬ(改行・四行下) おさなこエス やがてあおがん※」(一行空き)だが、旧訳の歌は「(三行下) ※うつくしきばらはたのし【】(改行・三行下) イエスのめぐみはさらいたのし※【】」であり、新旧で訳し方がかなり異なつてゐる。歌詞の翻訳なので、底本に原語のものを使うか重訳本を使うかで大きな

差が出ているのか、もしくは宗教的に「讚美歌」自体の和訳が時代を経て異なっていたのかもしれない。

今度は登場人物に関して見てみると、子どもたち、〈雪の女王〉、〈鏡のかげら〉の刺さった後の〈カイ〉について、それぞれ大きな変化がみられる。

まず子どもたちだが、旧訳と比べ新訳ではより子どもらしさが強調されている。〈カイ〉と〈ゲルダ〉はお互いのことを、旧訳では「さん」付けで、新訳では「ちゃん」付けで呼んでおり、また「内の台詞が新訳では全体的に口語らしく簡単な口調になっている。

次に〈雪の女王〉像を見ると、そのイメージは新旧で随分異なっている。外見的特徴として、〈毛皮〉と〈ほうし〉はどちらも〈白い〉が、旧訳では〈氷〉、新訳では〈雪〉で出来ていることになっている。服装についてはそれ以外に特に変化はないが、それよりも興味深いのは〈カイ〉によって語られる〈雪の女王〉の外見の印象の違いである。新訳一二七頁五行目では「※まあそのうつくしいことといったら。※カイは、これだけかしこそうなりつばな顔がほかにあるうちは、どうしたっておもえませんでした。」とあるが、旧訳は「※女王は大層美しかつたので、※カイはこれよりも【一深く人の心を動かす】【うつくしい顔は、どうしたって思ひ出せるものではないと思ひました。】となつてゐる。ここで〈カイ〉は、新旧どちらも〈女王〉の「美しさ」について感嘆しているが、旧訳では〈うつくしい〉という語が二度繰り返されて強調されている代わりに、新訳では〈りつぱな〉となり、「美しさ」以外の要素が入っている。

この部分以外にも、〈雪の女王〉の姿形はほぼ、〈鏡のかげら〉が刺さった後の〈カイ〉によって語られているが、やはり旧訳ではや

たら〈うつくしい〉や〈きれい〉が強調され、新訳ではそれらの表現の代わりに〈わかい〉や〈かんぜん〉というような描写がされている。

さらに〈雪の女王〉像は、こうした外見からだけでなく、その台詞の口調からの違いも大きい。例を挙げると、新訳一二六頁五行目では「「ずいぶんよくはしつたわね。」と、雪の女王はいいました。」「あら、あなた、ふるえているのね。わたしのくまの毛皮におはいいり。」とあるが、この台詞は旧訳では「「ずいぶんよく走りましたね。あら、あなた「は寒さに」慄へていらつしやるのね。わたしの毛皮【の外套の中】におはいいりなさい。」と雪の女王は申しました。」である。旧訳では敬語を使って丁寧な言葉遣いで〈カイ〉に話しかけているが、改訳後は随分くだけて偉ぶった話し方である。

他にも新訳一二七頁五行目の「「さあ、もうほおずりはやめましようね。」と、雪の女王はいいました。「このうえすると、お前を死なせてしまふかもしれないからね。」が旧訳では「「さあ、もうキツスはやめませうね。」この上「「わたしがキツス」すれば、あなたは死んでしまひますからね。」と雪の女王は申しました。」であるなど、口調についてはかなり違いが見られる。またこの部分では〈カイ〉が死ぬかもしれないという点について、「「あなたは死んでしまひます」と〈カイ〉主体で考えている旧訳と違い、新訳では「「お前を死なせて」と自分主体で述べており、〈カイ〉の命に対する意識の違いも感じられる。さらに、前述の〈キツス〉と〈ほおずり〉の違いがここでもあるが、〈カイ〉を凍らせ、死まで導きかねないこの行為のイメージは、〈ほおずり〉か〈キツス〉かの違いによって大いに変化している。

最後に〈鏡のかけら〉の刺さった後の〈カイ〉についてだが、〈ゲルダ〉に対しての台詞が所々変わっている。〈カイ〉の意地悪な言葉遣いや悪態の程度が新旧で微妙にずれている部分も多い。

またこの〈カイ〉の価値観が、新旧でかなり異なっているという点も面白い。先に〈雪の女王〉像の部分で述べたように、〈カイ〉が〈雪の女王〉の外見に対して感じていることには新旧で差があり、別の場面で〈ゲルダ〉と〈虫目がね〉で〈雪〉を見た時の感じ方にも違いがある。これらの比較から、〈鏡のかけら〉が刺さった〈カイ〉は、旧訳では主に「美しさ」や「きれいな」、新訳では「たくみさ」「かしこさ」「完全さ」などに魅かれているようである。〈カイ〉は〈鏡のかけら〉によって、〈物をまぢがつてみたり、ものごとのわるいほうだけをみるようにな〉っているはずなので、この違いは物語を理解する上で重要であろう。

第三のお話 魔法の使える女の花ぞの

まず文章全体のことだが、この章では他の章と比べて読点の省略が多い。最初に述べた通り、読点は『雪の女王』全体を通して基本的に改訳後増えていることが多いのだが、〈第三のお話〉では反対に改訳後読点なくなっているものも同じくらい多い。読点に限らず、〈第二のお話〉と同じく新訳で旧訳の余分な部分が削られてシンプルな文章になっているもの自体も多いので、読みやすさや分かりやすさが重視されていると考えられる。

また、旧訳で多用されている〈けれど〉や〈けれど〉などの接続後や、〈〜に違いない〉や〈〜にすぎない〉という表現が、改訳後は別の表現に変えられており、同じ言葉を繰り返し使わないような

工夫もされている。

次に誤訳に関して見てみると、新訳一三六頁四行目の〈ばらの木は、みるみる※しずまない前とおなじように※、花をいっばいつけて、地の上にあらわれてきました。〉が、旧訳では〈ばらの木は見る／＼※前に沈んだ時のやうに※花を一杯【に】つけて、地の上にはあらはれて来ました。〉となっている。バラが〈花をいっばいつけ〉た様子は、旧訳では〈前に沈んだ時〉と同じとなっているが、これは「前」という語の解釈を誤ったものと考えられる。

続いて単語やニュアンスの違いを見てみると、最も注目すべきは、旧訳の〈キッス〉が、新訳は〈第二のお話〉では〈ほおずり〉に変化していたのに、この〈第三のお話〉以降は〈せつぷん〉となっている点である。同一の語の翻訳のはずが、新訳では〈第二のお話〉と〈第三のお話〉とを境に変わっている。これが意図的だったのかという点は量りかねる。

他に、進む様子を表す擬態語が〈どん／＼〉から〈ずんずん〉に、色に関して〈紫〉が全て〈青〉や〈水色〉に、〈げげげしい〉〈げげ／＼しい〉という語が〈ふうがわりな〉や〈にぎやかな〉に言い換えられるなど、改訳後決まって変えられている言葉があることも分かった。〈どん／＼〉や〈紫〉の変化の理由は不明だが、〈げげげしい〉に関しては、本来悪い意味で使われることの多いこの単語を、旧訳では良い意味を持たせるべき箇所で使用しているため、改訳後別の表現にしたと考えられる。

また、〈魔法〉の〈おばあさん〉の庭に咲く〈花〉のうちの一つも、改訳後〈うまのあしがた〉から〈たんぼほ〉に変わっている。どちらも黄色の野草ではあるが、〈うまのあしがた〉はキンポウゲ科、〈た

んぼぼ)はキク科の全く別の花である。こうした単語の違いや、他にも細かいニュアンスの違いによって、思い浮かべる情景が異なってくる場合が多く見られた。

ニュアンスの違いについてはさらに、新訳で擬人的な表現が多くなっている点も見逃せない。例えば(川)に関して、新訳一三〇頁一六行目では(すると川の水が、よしよしというように、みように波だつてみえたので、ゲルダは(略)とあり、旧訳では(ゲルダは河の水が、妙に波だつたやうに思ひましたので)となつている。さらに新訳一三一頁四行目の(なぜなら、※川はカイをかくしてはいなかつた※からです。)は旧訳では(なぜなら【ば】※河の中にカイはあなかつた※からです。)となつている。新訳の(川)については(よしよしというように)や(かくして)などまるで生きているように描写されている。(木製のふたりのへいたい)や(鐘)についても同じことが言え、新訳ではそれらのものに命が吹き込まれている。最後に登場人物を見てみると、子どもたちに関しては(第二のお話)と同じく、新訳の方がより子どもらしさが表れている。(カイ)を指す語が旧訳では「彼」、新訳では「この子」であることや、(ゲルダ)の台詞の口調の違いから、新訳では子どもたちが自然に子どもらしく、反対に旧訳ではどこか大人びた描写が多すぎる。会話文の例を挙げると、新訳一四二頁一五行目のゲルダの台詞が分かりやすい。新訳は(※ああ、どうしましょう。あたし、こんなにおくられてしまつて※。)と、ゲルダはいいました。「もうとうに秋になつているのね。※さあ、ゆつくりしてはられないわ。※。」と簡単な言葉遣いだが、旧訳では(※ああ、随分、わたしはぐづ／＼してゐたのだこと※)もう秋になつてゐるのね。※二度と休むことはします

まい。※)とゲルダはいひました。)とあり、子どもというよりは女性らしい話し方といえる。

(魔女)の(おばあさん)に関しては、(おばあさん)が魔法を使う目的が、旧訳では「慰み」、新訳では「たのしみ」で随分異なつている。(魔女)の(おばあさん)についてはこの前後以外ほとんど言及されていないため、この目的の違いは(おばあさん)像に大きく影響している。

第四のお話 王子と王女

文章全体については、旧訳の会話文で「」が前の文からそのまま続いているものを、新訳では改行して表記してある場合が多く、台詞が目立ち、地の文から独立している印象を与えている。

また、旧訳での作文のような硬い文章が、新訳では適度に省略されるなどして分かりやすくなつていくものが多い。旧訳では全体的に主語の「くは」や修飾語の「くの」といった指示語が細かく書かれすぎており、新訳ではその部分の省略が多く見られた。

他にも、新訳ではダッシュ(――)が上手く使われており、話が少し変わる際や、物語が展開する際に、次への緊張感や期待感を高めたり、その前の流れから一呼吸置いたりといった役割を果たしている。ダッシュとは別に、新訳では(王子)が目醒ます場面で(……)が使われ、この部分には他と違う雰囲気が出されている。探し求めた(カイ)かもしれない人物に(ゲルダ)が出会う場面なので、この章の山場として強調されているのかもしれない。

この章では、誤訳や分類Fが多く、特に(からす)の台詞と地の文とが混乱している部分が目立つ。新訳一四六頁四行目からの部分

では新訳に（からす）の台詞を閉じる鍵括弧（）がなく誤訳と思われる、また一四七頁五行目からの部分では新訳と旧訳とで地の文か（からす）の台詞であるかが異なっている。章の前半は（からす）の話す説明が中心となっているので、地の文との区別が付かなくなっているようである。

また、一五三頁一四行目の（馬）や（かりうど）たちが（かべにうつつたかげのように見え）たことを（女がらす）が説明している場面では、新訳は（略）じょうのいいことに、あなたは、ねどこの中で※あのひとたちのお休みのところがよくみられます。※となっているが、旧訳は（略）都合のいいことは、あなたは寢床の中で※）になっている。ここで（ゲルダ）は、旧訳では「その人たちの夢を見る」、新訳では「その人たちの寝ているところを見る」ということになり、全く違う意味の訳だが、どちらが誤訳であるかは判断しがたい。

他に分類Fのもので、（お城）に王子候補としてやってきた（わかい男）たちに関して、新旧で全く異なる訳になっているものもある。新訳一四八頁三行目では（と）ろが、だれも、（てん）のなかにはいると、※かぎたばこでものまされたようにふらふらで※）とあるが、旧訳ではこれが【まるで】誰も御殿の中にはいると、※眠り薬でも飲んで、眠ってしまったやうになって※）という表現で、（わかい男）たちの様子の例えが大きく違っている。

次に、単語やニュアンスの違いを見ていくと、地の文において、旧訳は（カイ）のままだが、新訳は途中から（カイちゃん）になっているという点が気になる。旧訳の方が地の文として正しいあり方

ではあるが、新訳では地の文にまで（ゲルダ）の気持ちが強く表されており、読者が感情移入しやすくなっている。

また、単語やニュアンスの違いは、（お城）で働く人々の描写に関して多く見られる。改訳で（侍女）や（おつき）の女は（女官）に、（おつきの家來）が（お役人）や（馬車の人）に、（召使）が（べつと）に、（馬丁）が（おさきばらい）になり、またその服装などの描写も一定の変化があり、複数回ある描写でこれら全ての変化が統一されている。

登場人物については、特に（王子）と（王女）に関する変化が大きい。新訳では（からす）や（ゲルダ）が（王女）に対し常に敬語を使い、（王女さま）と敬称を付けて呼んでいる。また（からす）は（お城）を訪ねた（男の子）に対しては敬語を使っていないが、話が進みその（男の子）が（王子）になってからは敬語を使って話している。敬語が一部でしか使われていない旧訳と違い、新訳では（王子）や（王女）の存在が「敬うべき人」としてあり、王族への意識があって童話らしさが感じられる。

（王女）像や（王子）像では、結婚に関する価値観が新旧で違っている点も興味深い。まず（王女）の夫選びに関しては、新訳一四六頁九行目では（でも※夫にするなら、ものをたずねても、すぐとこたえるようなのがほしい※とおもいました。）とあるが、旧訳では（でも【王女は、】姿や形が美しいばかりでなく、【※物を尋ねてもすぐ答へる【ことが出来る】やうな夫がほしい※と思ひました。】）となっている。（王女）は新旧共に自分の夫になる人に「賢さ」を求めているが、旧訳ではその前提条件として「美しさ」も必要としている。新訳では「美しさ」については特に触れられておらず、新旧で

の〈王女〉の価値観の違いが表れている。

さらに、実際の二人が結婚した経緯についても、新訳一五〇頁一六行目では(略)ただ、王女さまがどのくらいかしこいかわろうとおもってやつてきたのですが、それで王女さまがすきになり、王女さまもまたその子がすきになったというわけです。)とあるが、旧訳では(たゞ、王女がどのくらいかしこいかわらうと思つてやつて来たのでした。そして※王女の賢いことがわかり、王女もまたその人のかしこいことがわかりました。※)となつており、新旧で結婚の理由が異なつてゐる。

人物については他に、〈お城〉を訪ねた〈男の子〉の描写が、旧訳では(人(その人、あの人等)、新訳では(子(その子、あの男の子等)であり、新訳の方が子どもであることが強調されている。

また、〈ゲルダ〉に関する描写を見ると、新訳一五六頁六行目で〈王子〉と〈王女〉から馬車をもらう場面で、次のような違いがある。新訳は〈ゲルダは※ただ、ちいさな馬車と、それをひくうまと、ちいさな一そくの長ぐつがいただきとございますと、いいました。それでもういちど、ひろい世界へ、カイちゃんをさがしに出ていきたいのです。※、旧訳は〈ゲルダは※カイを捜しに世界中を走り廻るために、たゞ小さな馬車と、それを引く馬と、小さな一足の長靴がほしいと申しました。※)とあり、「カイを探す」ということと「馬車などが欲しい」ことについて新旧で順序が逆に書かれてゐる。どちらも後の方が印象に残りやすく、旧訳では(カイを探すために)ほしい)こと、新訳では(馬車をもらつて)カイちゃんをさがし)たい)ことが、〈ゲルダ〉にとつて強い思いであると考えられる。この部分は地の文であるが、先にも述べた通り新訳では(カイ

ちゃん)となつており、〈ゲルダ〉の願いがより強く伝わってくる。

第五のお話 おいはぎのむすめ

文章の書き方に関しては、基本的にはこれまでの章と同じような変化だが、加えて、新訳では地名などの解説が下部にあり、旧訳よりも丁寧である。こうした解説は次章以降も一部加えられている。

誤訳については四か所あるが、どれも重要な所で触れておく。第一は、新訳一五八頁五行目で(おいはぎ)が〈ゲルダ〉の乗る(馬車)を見つげる場面で、新訳では(略)馬車の光は、※たいまつのようにちらちらしていました。それが、おいはぎどもの目にとまつて、がまんがならなくさせました。※、旧訳では(馬車の光は※遠方まででらしてあました。それで追剣共は目がくらんで、それを見つめることが出来ないほどでした。※)となつてゐる。その後(おいはぎ)が(馬車)を襲うという流れから、旧訳は誤訳である。

誤訳の第二は、新訳一六〇頁三行目で〈ゲルダ〉と(おいはぎ)たちが(林のおく)へ移動する場面である。新訳では(それで、※ゲルダとふたり※馬車にのりこんで)だが、旧訳では(※その子と女とゲルダとは※馬車に乗つて)となつており、(馬車)に乗る人が違う。新訳では〈ゲルダ〉と(むすめ)の二人、旧訳ではさらに(ばあさん)も加わり三人になつてゐるが、どちらが誤訳かは不明である。

第三は、新訳一六三頁八行目で(おいはぎ)たちが(たき火)を囲んでゐる時の(ばあさん)の描写で、新訳では(そのなかで、ばあさんが※とんぼをきりました。※、旧訳では(そして)【追剣の】おばあさんは【】※ひよろ／＼／＼そこらあるきまはつてあました。

※)となつている。(ばあさん)の行動が、新旧で「歩き回る」のと「宙返り」とで異なつており、(ゲルダ)がその様子を怖がるという流れから考えると、新訳の方が正しそである。

第四は、新訳一六七頁一〇行目で(となかい)が走っている時にした音についてである。新訳には(ひゅッ、ひゅッ、※空で、なにが音がしました。それはまるで火花があがつたように。※)とあり、旧訳ではこれが(ひゅう、ひゅう、※風を切つて、馴鹿は駆けて行きました。空はまるで燃えたつた火のやうに見えました。※)となつている。この(ひゅッひゅッ)という音について、旧訳では「となかいが風を切つて駆ける音」となつているが、これは誤訳だと思われる。この次の(となかい)の台詞とのつながりを考慮すると、おそらくこの音は(北極光)(オーロラ)の音である。

単語やニュアンスに関しては、特定した変化はないが、(おいはぎ)のこもる(山塞)の様子については所々表現の違いが目立つ。

次に登場人物だが、この章で最も注目すべき変化は、(おいはぎ)の(こむすめ)像であると言つても過言でない。まず地の文から見ると、この少女は旧訳では基本的に(追剥の)娘、一部で(女の子)と表記され、新訳では(おいはぎ)の(こむすめ)、一部で(こむすめ)である。一般的に「こむすめ」の語にはあざけりの意味が含まれることが多いが、新訳でのそれも、旧訳の(娘)より下賤なイメージを与えている。

この(こむすめ)の印象の相違には、彼女の話す言葉遣いの違いも大きく影響している。(こむすめ)の口調は、新訳では荒っぽく卑俗だが、旧訳は(おいはぎ)にしては随分上品である。例として新訳一六〇頁一三行目の(あたいは、おまえとけんかしたつて、あの

やつらに、おまえをころさせやしないよ。)と旧訳の(「たとへ、わたしはお前さんとけんくわしたつて、あのやつらに、お前さんを殺させやしませんよ。)を挙げておく。改訳後は一人称が(わたし)から(あたひ)になり、(ゲルダ)を(お前さん)から(おまえ)と呼ぶように変わつて、敬語もなく、がさつな(こむすめ)像が作り上げられている。

さらに、新訳では(こむすめ)の台詞に、(まあいいや。)のような無関心を装う言葉が二度も追加されていることも興味深い。一つは、新訳一六四頁一五行目で(ゲルダ)が(森のはと)から(カイ)の手掛かりを得たことを(こむすめ)に話した後の台詞で、旧訳の(「どつちにしても同じことだ。こに一言追加され、(まあいいや。どつちにしてもおなじことだ。こ)となつている。

もう一つは、新訳一六六頁九行目で(ゲルダ)を(となかい)に乗せた後の台詞で、旧訳の(「だん／＼これから」寒くなるから、お前さんのために毛皮の長靴をとつておいたのさ。)という部分に、(「まあ、どつでもいいや。)」と(こむすめ)はいました。「それ、おまえの毛皮のながぐつだよ。だんだんさむくなるからね。」と追加されている。

これらで追加された一言は、外面だけを捉えると「投げやり」のようだが、(ゲルダ)が上手くやれるよう取り計らつたり、世話をしている時に限つてこうした言葉が追加されていることから、(こむすめ)のひねくれた優しさが伝わってくる。新訳の方が(こむすめ)の人物設定が明瞭で、その性格をよく表現しているといえよう。

人物については他に、(おいはぎ)の(ばあさん)(こむすめ)の(母親)の印象が新旧で多少違つている。地の文で彼女を指す語が、

旧訳では〈年とつた追剥女〉や〈女〉なのに対し、旧訳では〈おいはぎばば〉や〈ばあさん〉となっているため、この人物の年齢や様相のイメージが異なってくるのである。

第六のお話 ラップランドの女とフィンランドの女

文章の書き方に関しては他の章とほぼ同じだが、この章で特徴的なのは終わり方である。章の終盤の新訳一七四頁七行目、〈カイ〉の話題になる部分では、〈それからまずお話をすすめましょう。〉という一文が追加されている。これまで、物語の序章のような〈第一のお話〉を除いて、地の文がこのように一歩引いた目線から「お話」、つまり「この物語自体」について言及する部分はなかったため、ここでの追加は異色となっている。底本からこのような書き方になっているのかどうかは分からないが、次の〈第七のお話〉は最後の章であるため、こうした書き方で強調したのかもしれない。

誤訳については、前章と同じ〈ひゅツ、ひゅツ〉という音に関連して再び見られる。またしても〈となかい〉が走っている中で描写で、新訳一六九頁二行目では〈ひゅツひゅツ、※空の上でまたいいました。※〉とあり、旧訳は〈しゅツ、しゅツ、※風を切つて、それは飛んで行きました。※〉となっている。ここでは前章と違って、前文で〈となかい〉が発している描写があるため、旧訳のように〈それ〉の指す〈となかい〉の音とも取れなくはない。しかし「第五のお話」と同じような音であり、また次の文に〈極光〉（オーロラ）の描写があることから考えて、やはりこの音は〈極光〉の音であり、ここでも旧訳はおそらく誤訳である。

分類Fの内、新訳一七〇頁一三行目の〈へどうか、このむすめさん

に、(略)※のものをひとつ、つくってやって※いただけませんか。〉では、旧訳の「あなたは」あの娘さんに(略)※一吹き風の言う願いが大きく異なっている。この前に〈風〉の話が続いていることから考えて、旧訳の〈一吹き風の風〉の方が自然に感じられるが、原語版を底本とした大畑末吉訳⁴では「飲みぐすり」となっており、新訳の〈のみもの〉は正しい訳であると予想される。

単語やニュアンスの違いは、〈雪〉に関して多く、新旧での〈雪〉の様子に多少のずれが生じている。例えば、新訳一七三頁二行目では〈それはみんなまぶしいように、きらきら白くひかりました。〉これこそ生きた雪の大軍でした。とあるが、旧訳では〈それはみんな目のくらむやうに白い生きた雪のかたまりでした。〉となっている。ニュアンスの違いに加え、旧訳の〈かたまり〉という語は〈生きた〉と付いてはいてもどこか無機質な「物」というイメージを与えているが、改訳で〈大軍〉となり擬人的な表現になっているという変化もある。

また、新訳一七三頁一三行目で〈ゲルダ〉が唱える〈主の祈〉に關しては、旧訳の〈お祈り〉という単語だけの表現に対し、新訳では〈※いつもの主の祈の「われらの父」をとなえました。※〉と詳しく書かれている。

そしてこの〈主の祈〉によって現れる〈天使〉たちについては、旧訳では〈軍勢〉、新訳では〈天使軍の一隊〉と表現されており、この表現の違いからそのイメージも多少変わってくる。新訳では「天使」の要素が入っていることで、旧訳の単なる「軍勢」という争いを連想させる言葉よりも、どこか正しきや善良さが感じられる。

登場人物については、〈ゲルダ〉に注目したい。(となかひ)と別れた後の〈ゲルダ〉の描写では、新訳一七三頁一行目で〈かわいそうに、ゲルダは、くつもはず、手ぶくろもはずに、氷にとじられた、さびしいフィンマルケンのまったなかに、ひとりとのりこされて立っていました。〉とあり、旧訳の〈可哀さうにゲルダは、靴もはず手袋もはずに、さびしい【寒い】フィンマルクの【】【ま】つたなかに突つ立つてみました。〉に、「閉鎖的な空間に一人ぼっちでいる」という要素が加えられている。新訳は〈ゲルダ〉の心細さがさらに強調され、より感情移入しやすい表現となっている。

第七のお話 雪の女王のお城でのできごと そののちのお話

文章の書き方については他の章とほぼ同じだが、新訳ではこの章で唯一、括弧書き○の文がある。新訳一八〇頁一四行目の〈おいはぎのむすめが(馬)に乗って現れる場面で、ゲルダはその馬をしっていました。(それは、ゲルダの金の馬車をひっぱった馬であったからです。〉とあり、旧訳では普通の文だった部分が括弧書きになっている。

訳が全く異なっているものに、〈ゲルダ〉と〈カイ〉の話聞いた〈おいはぎのこむすめ〉の台詞がある。新訳一八一頁一六行目では〈※そこで、よろしく、ちんがらもんがらか、でも、まあうまくいって、よかつたわ。※〉とあるが、同じ部分が旧訳では〈※手つとりばやくさ。※〉であり、底本の違いによるものかもしくは誤訳と思われる。

単語やニュアンスの違いで目立つのは、〈雪の女王〉の〈お城〉の〈広間〉の描写、その中でも特に、〈カイ〉が〈永遠〉を作ろうと

している場面である。〈カイ〉が使っているものについて、旧訳の〈鋭い氷のかけら〉と新訳の〈うすい氷の板〉とで大きさや形の印象が異なっていたり、それで作る様子について、旧訳では〈積木を重ねてむづかしい物の形を作らうとするのと同じ〉、新訳では〈むづかしい漢字をくみ合わせるよう〉と例えるなど、他にも方々で表現が違っている。

〈カイ〉の作ろうとしている〈永遠〉そのものについては、旧訳では共通して〈字〉となっているが、新訳では地の文は〈ことば〉、〈女王〉の台詞では〈形〉と表されており、この表現の違いも面白い。人によって解釈に多少違いはあるだろうが、一般的に〈字〉という語は「記号」としてのイメージが強く、〈ことば〉はもっと内容に重点が置かれて、〈形〉では見た目が重視されているような印象である。

さらに完成した〈永遠〉についても、旧訳は〈立派に〉、新訳は〈はっきりと書かれていたとされておき、読者が思い浮かべる〈永遠〉のイメージに変化がありそうである。

他の章ではこの後登場人物に関連して変化を見ていたが、最終章である今回は〈ゲルダ〉と〈カイ〉の再会に注目し、それ以降の流れを追って考察していきたい。

まず、〈ゲルダ〉が〈カイ〉を見つげる場面を見てみると、新訳ではその瞬間がダッシュ(――)で強調されている。そしてその際に〈ゲルダ〉が叫んだ言葉は、新訳一七八頁三行目では〈カイ、すきなカイ。ああ、あたしどうとう、みつけたわ。〉、旧訳では〈カイちゃん、好きなカイさん。【これで】やつとわたしは【あなたを】見つけたのよ。〉であるが、旧訳では「カイちゃん」、「カイさん」の

両方が一つの台詞の中にあり、少し不自然である。一方、これまで「ちゃん」付けで統一されていた新訳の「ゲルダ」は、ここで初めて「カイ」と呼び捨てで呼んでおり、この時のゲルダの気持ちの強さを示す意図が感じられる。

その後の、「ゲルダ」のことが分かった「カイ」の台詞についても、新訳一七九頁一行目では「やあ、ゲルダちゃん、※すきなゲルダちゃん。※」だが、旧訳では「ゲルダちゃん。※ゲルダちゃんだったの。※」であり、新旧で意味合いが大きく異なっている。「ゲルダだと分かった」という要素しかない旧訳に対し、新訳では「ゲルダ」への好意が示されている。

「氷の板きれ」が「ゲルダ」たちと一緒に踊り出すことに関しては、新訳では「それがあまりたのしそうなので」と追加され、その理由が明記されていて分かりやすい。そしてこの踊りによって「永遠」を綴ることができると、その際に「カイ」が解放されることの描写も微妙に違っている。旧訳では「体」についてのみの言及だが、新訳の「自由になれる」という表現には「体」だけでなく「心」も含まれているような印象である。

おわりに

本論文では『雪の女王』の新訳を中心に旧訳との比較を行ったが、その変化は予想以上に大きかった。改訳によって、情景や人物の描写は洗練され、その様子や心の動きがよく捉えられていた。新訳は旧訳と違って直訳のような硬い文章でなく、それでいて原作の雰囲気や上手く残されており、平仮名中心で表現も柔らかく、常に童話

らしく描かれた素晴らしい翻訳であった。旧訳から二十余年を経て、翻訳者として、また児童文学者として、楠山が大きく発展を遂げていることが分かる。

既稿「楠山正雄のアンデルセン翻訳—全集の新旧版の比較—」では、旧訳と新訳では楠山の翻訳に対する姿勢、その意識の違いがあることを指摘したが、この意識の差が、作品の翻訳の仕方、内容の違いにも確実に繋がっているということが、『雪の女王』の比較によってはっきりと分かった。今回は一作品に絞って比較したが、全集の中の他の作品の翻訳も、新旧でかなり異なっているようである。

今後の展望としては、今回立ち返ることのできなかつた底本への言及、また『雪の女王』以外の作品について、さらに楠山の作品と他の翻訳者の作品との比較などが挙げられる。

一題は「童話集」となっているが、アンデルセン童話の「全集」として企画されたものである。

二最初の発行は一九四九年だが、一九四九〜一九五五年の間に出版された分は絶版となり、五五年それに遺稿の分を加えて新たに三冊の作品となったようである。

三ここでの章題は新訳のものを記載する。

四大畑末吉訳『アンデルセン童話集』（岩波書店、一九九三年）

「第七のお話」新旧比較表

頁・行	旧訳本文	新訳本文	分類	考察
175・2	雪の女王のお城での出来事と、その後の話【。】	雪の女王のお城でのできごととそのちのお話	B, C	旧訳では章題に句読点が付いている。旧訳で読点になっているところは、新訳では空欄で表されている。
175・4	雪の女王の※ <u>御城</u> の壁ははげしく吹き積る雪から出来てゐて、※窓や戸口は身を切るやうな風で出来てゐました。	雪の女王の※ <u>お城</u> は、はげしくふきたまる雪が、そのままかべになり、※窓や戸口は、身をきるやうな風で、できていました。	A, C, D, F	主語が違うからか、旧訳では「壁」と「窓や戸口」の説明、新訳では「お城」全体の説明をしているようである。
175・6	そこには百以上も広間が順に並んでゐて、みんな雪に吹きつけられてゐました。	そこには、百いじょうの広間が、じゅんにならんでゐました。それはみんな雪のふきたまったものでした。	A, C, E	
175・8	広間の中で一番大きいものは、 <u>数哩にわたつて</u> ゐました。	いちばん大きな広間はなんマイルにもわたつてゐました。	B, C	
175・9	強い北極光がこの広間をも照してゐたので、その大きな、がらんとした、氷のやうに冷たい <u>広間は太陽給隨に光つて</u> ゐました。	つよい極光がこの広間をもてらして、それはただまう、ほか大きく、がらんとして、いかに氷のやうにつめた、ぎらぎらして見えました。	A, C, D, E	・旧訳の「～な広間は…」という表現では「…」にあたる「綺麗に光つてゐる」という表現のようだが、新訳の「それ(広間)は～で…」という表現では「～も…」も全て広間の様子として重要なことのように感じる。 ・「綺麗に光つてゐる」と「ぎらぎらして見える」たのは広間の雰囲気が変わってくる。
175・12	楽しみといふものはまるでないところでした。	たのしみというものの、まるでないところでした。	A, C	
175・13	あらしが音楽を奏で、 <u>熊ノ達</u> があと足で立ちあがつて、氣どつて踊るダンスの會もなれば、若い白狐の貴婦人の間に、さやかな茶話會が開かれる【なんて】ことも、決してありません【でした】。	あらしが音楽をかなで、ほっきょくぐまがあと足で立ちあがつて、氣どつておどるダンスの會もなれませぬ。わかい白ぎつねの貴婦人のあいだに、ささやかなお茶の會がひらかれることもありません。	A, B, D, E	
176・2	(略)たゞがらんとして、(略)	(略)ただもうがらんとして、(略)	A	
176・3	※北極光はたゞもうあか／＼と輝いてゐたものですから、それをはつきりと見ることが出来ました。※	※極光のもえるのは、まことにきそく正しいので、いつがいちばん高いか、いつがいちばんひくいかに、はっきり見ることができました。※	D, F	極光の描写、何が「はつきり見」えるのかが違う。旧訳では単に「輝いてゐる」ことについてだが、新訳ではその「きそく正しい」さのために「高さの変わる様子」が分かれると詳しく書かれている。
176・4	この大きな【、】がらんとした【、】雪の広間のまんなか、何千といふ数に割れた【、】凍つた湖水のかけらがありました。	このはてなく大きながらんとした雪の広間のまん中に、なん千万という数のかけらにわれてこつた、みずうみがありました。	A, B, C, D, E	「雪の広間のまん中」にあったものが、旧訳では「(湖水)のかけら」、新訳では「(かけら)に割れて凍つた」みずうみなので、何に注目しているかが微妙に違う。
176・6	割れた湖水は【皆】、同じ【やうな】形をして【あましたので】、立派な美術品を見るやうでした。	われたかけらは、ひとつひとつおなじ形をして、これがあつまつて、りっぱな美術品になっていました。	A, B, C, D	旧訳では「われた湖水」となっているが「湖水」がいくつもあるわけではないので、新訳の「われたかけら」の方が自然である。
176・7	この湖のまん中に、内にゐる時は雪の女王が坐つてゐました。	このみずうみのまん中に、お城にいるとき、雪の女王はすわつてゐました。	C, D	旧訳の「内」という語は、「女王」の住む「お城」としては大衆的な表現である。
176・7	そして【、】自分は理性の鏡の中に※坐つてゐる※のだ、(略)	そしてじぶんは理性の鏡のなかに※すわつてゐる※のだ、(略)	B, F	新訳では、旧訳の「坐つてゐる」の「る」が抜けて、代わりに空欄になっているが、単なる脱字と思われる。
176・9	カイは寒さのため【に】、【全身】紫色といふよりは、【ほとんど】黒くなつてゐました。	カイはここにいる、さむさのため、まっ青に、というよりは、うす黒くなつてゐました。	A, B, C, D	旧訳の「紫色」が新訳では「まっ青」になっている。これまでもそうだったように、旧訳での「紫」は全て、なぜか改訳で「青」や「水色」などそれに近い色に変えられている。

176・10	といふのは雪の女王がキッスして、カイの體から、※さむさとをつて※しましたからです。	とうよりは、雪の女王がせつぶんして、カイのからだから、※さむさをすいとつて※しましたからです。	A、C、D、F	・「キッス」→「せつぶん」 ・旧訳では「さむさとをつて」とあるが、おそろくと」と「を」が反対の誤字で、正しくは「さむさをとつて」であると思われる。
176・11	カイはたひらな幾枚かの鋭い氷のかけらを、あつち【、】こつちに運んで、色々それを組合せて、何か作らうと思ひました。	カイは、たいらな、いく枚かのうすい氷の板を、あつちこつちからはんできて、いろいろそれをくみあわせて、なにかつくりうとしていました。	A、B、C、D	どちらにも「たいらな」とはあるが、旧訳の「鋭い氷のかけら」と、新訳の「うすい氷の板」とでは、カイの持っている「氷」の大きさや形のイメージが変わる。
176・13	まるでわたし達が、※積木を重ねてむづかしい物の形を作らうとするのと同じ。※	まるでわたし達が、※むづかしい漢字をくみ合わせるようにして。※	F	カイが氷で作る様子の例えが、「積木」と「漢字」とで違ふ。底本によるものか。
176・14	カイもなか／＼見事な形を作りました。	カイも、この上なく手のこんだ、みごとな形をつくりあげました。	A、C	新訳の「手のこんだ」からは、単に「みごと」なのではなくよく作りこまれている感じが伝わる。
176・15	(略)世の中で※一番※大切なもののやうに見えました。	(略)この世の中で※一ばん※たいせつなもののようにみえました。	A、F	新訳は「一ばん」となっているが、「ば」は誤字で正しくは「いちばん」だと思われる。
176・16	カイは字を作らうと思って、氷のかけらを並べましたが、自分が作りたいと思ふ字、即ち、「永遠」といふ字をどうしても作ることは出来ませんでした。	カイは、形でひとつのことばをかきあらわそうとおもって、のこらずの氷の板をならべてみましたが、自分があらわしたいとおもふことば、すなわち、「永遠」ということばを、どうしてもつくりだすことはできませんでした。	A、C、D	「字」と「ことば」という語の違いで雰囲気が違う。「字」という語は「記号」としてのイメージが強いが、「ことば」はもっと内容に重点が置かれている感じがする。
177・3	でも【雪の】女王はいひました。	でも、女王はいていました。	A、B、C	
177・4	「もしお前に、その字を作ることがわかれば、【自分の】體が思ふやうになるよ。(略)」	「もしおまえに、その形をつくるのがわかれば、からだも自由になるよ。(略)」	B、C、D	女王は旧訳でも「字」、新訳は「形」という語を使っている。
177・6	けれども、カイには出来ませんでした。	けれども、カイには、それができませんでした。		
177・7	「これからわたしは温かい■々へ急いで行つて来よう。そして黒い鉢をのぞき込んで来てやらう。」と雪の女王はいひました。	「これから、わたしは、あたたかい■を、ざつとひとまわりしてこよう。■と、雪の女王はいひました。「ついでにその黒なべをのぞいてくる。」	A、C、D、E	火山を指す語が「黒い鉢」と「黒なべ」で違っている。
177・8	黒い鉢といふのは、※火をはいてあるエトナの山と、ヴェスヴィオの山のことでした。※	黒なべといふのは、※エトナとかヴェスヴィオとか(※エトナはイタリア半島の南シチリア島の火山。ヴェスヴィオはおなじくナポリ市の東方にある火山。)、いろいろな名の、火をはく山のことでした。※	A、D、E、F	・旧訳では「エトナ」と「ヴェスヴィオ」の2つの山だけを指しているが、新訳ではそれらは火山の例であり、「黒なべ」には他の火山も含まれている。 ・「エトナ」と「ヴェスヴィオ」について、下部に詳しい解説が載せられている。
177・10	「(略)葡萄やレモンを【、】おいしくするために【は、】まうしななければならぬから。」	「(略)ぶどうやレモンをおいしくするためにいいそうだから。」	B、C	
177・12	(略)氷の大廣間で、氷のかけらを見つめて、(略)	(略)氷の大広間のなかで、氷の板を見つめて、(略)	A、D	
177・13	【カイはまるで】じつと【したま】動かずにゐましたから、人はカイを凍りつけて、死んでしまったのだと思つたかも知れません。	もう、こちこちになって、おなかのなかの氷が、みじみじしいうかとおもうほど、じつとごかずにいました。それをみたら、たれも、カイはこおりついたなり、死んでしまったのだとおもつたかも知れません。	A、B、C、F	カイが動かずにいたことについて、改訳後はその様子の描写が詳しくなっている。よりその「冷たさ」や「固さ」が伝わってくる。
177・16	その時ちやうど (略)	ちやうどそのとき、(略)	E	
177・16	(略)ゲルダが夕のお折をあげると、眠つ【てしまつ】たやうに靜かになつてしまひました。	(略)ゲルダが、ゆうべのおいのりをあげると、ねむつたやうに、しずかになつてしまひました。	A、B、D	
178・2	(略)寒いからんとした廣間をぬけて、とう／＼カイを見つめました。	(略)さむい、からんとしたひろまをぬけて、——とうとう、カイをみつめました。	A	新訳では、カイを見つめる瞬間が「——」で強調され、続く「とうとう」の意味がより深みを持っている。

178-3	で、いきなりカイの首すぢめがけて飛びかゝつて行つて、堅く抱きしめながら、(改行)「カイちゃん、好きなカイさん。【これで】おつとわたしは【あなたを】見つけたのよ。」と叫びました。	で、いきなりカイのくびすじにとびついて、しつかりだきしめながら、(改行)「カイ、好きなカイ。ああ、あたしとうとうみつけたわ。」と、さけびました。	A、B、C、 D、E	「ゲルダー・カイ」の呼び方が違う。旧訳では「カイちゃん」、「カイさん」の両方が1つの台詞の中にあり少し不自然である。一方これまで「ちゃん」付けて統一されていた新訳は、ここでは初めて呼び捨てになっており、意図的に変えてこの時のゲルダの気持ちの強さを表しているようである。
178-6	けれどもカイは少しも動かさず、じつと冷たくなって坐つておりました。	けれども、カイは身ゆるぎもせずに、じつとしゃほこぼつたりつめたくなっていました。	A、C、E	新訳のカイは「しゃほこぼつ」ているとあり、体が緊張している様子が表されている。
178-7	それはカイの胸の上に落ちて、心臓の中で浸みこんで、氷【のかけら】を溶かして、【そして】心臓のなかにあつたガラスのかけらをなくしてしまいました。	それはカイのむねの上におちて、しんぞうのなかにまで、しみこんで行きました。そこにたまつた氷をとかして、しんぞうの中の、鏡のかけらをなくしてしまいました。	A、B、C、 D、E	旧訳では「ガラスのかけら」となっているが、「第二のお話」でカイの心臓に入ったのは「鏡のかけら」であり、他にも「氷」や「湖水」など別の「かけら」が出てくる中で「鏡」という語が使われず「ガラス」と変わっているのは少し紛らわしい。
178-9	ゲルダは【歌を】歌ひました。	ゲルダはうたいました。	B	
178-10	(3字下)※うつつきばらはたのし。 (3字下)イエスのめぐみはさらしたのし。※	(一行空き) (3字下)※ばらはのな さきではちぬ (3字下)おさな子エス やがてあおがん※ (一行空き)	A、F	「第二のお話」にあるのと同じ讃美歌だが、その時とは違って、旧訳の「ばらはたのし」の後は読点でなく区点になっており、また新訳は「」がなくなっている。歌詞自体の訳し方はそれぞれ前と同じなので、新旧で大きく違う訳になっているのはやはり底本の違いか。
178-14	カイがあまりひどく泣いたものですから、ガラスの刺が目から出てしまいました。	カイが、あまりひどく泣いたものですから、ガラスのとげが、目からぼろりとぬけてでてしまいました。	A	「ぼろりと」の一言の追加で、改訳後は随分その様子が悪い浮かべやすくなっている。
178-15	するとカイは、それがゲルダであることがわかつたので、大喜びで聲を上げました。	すぐカイは、ゲルダがわかりました。そして、大よろこびで、こえをあげました。	A、C、E	
179-1	「ゲルダちゃん。※ゲルダちゃんだったの。※	「やあ、ゲルダちゃん。※すきなゲルダちゃん。※	A、E、F	旧訳のカイは「ゲルダだと分かつたこと」しか言っていないが、新訳のカイは「すきな」とゲルダへの好意が示されており、大きく違っている。
179-1	【あなたは、】今までどこへ行つて【あ】たの『そしてまた、ほくはどこにあたのでせう。】(略)	——いまでもどこへいつたの『そしてまた、ほくはどこにいたんだらう。】(略)	A、B、C、E	カイもやはり旧訳では丁寧な言葉遣いであり、新訳の方が子どもらしい。
179-3	「(略)なんて大きくなって、がらんとしてあるんだらう。」	「(略)なんて大きくなって、がらんとしているんだらうなあ。」	A、C	
179-4	そしてカイはゲルダにかじりつききました。	こういつて、カイは、ゲルダに、ひもとりつききました。	A、C	
179-5	氷のかけらまで、よろこんで踊り出しました。	それがあつたのしそうなので、氷の板きれまでが、はしゃいでおどりました。	A、C、D	「氷のかけら」→「氷の板きれ」 新訳では「氷」も一緒になって踊り出した理由があり、分かりやすい。

179-6	そして疲れてまた倒れてしまった時、氷のかけらはひとりでも、もしカイがその雪が作れたら、カイが自分の體を思ふやうにすることが出来るやうにしてやらう。そして襦袢も、世界もやらうと、雪の女王がいつた字【の形】を作りました。	※そして、おどろつかれてたおれてしまいました。そのたおれた形が、ひとりでも、ことばをつづっていました。それは、もしカイに、そのことばがつづれたら、カイは自由になれるし、そしてあたらしいそりぐつと、のこらずの世界をやらうと、雪の女王がいつた、そのことばでした。※	A、B、C、 D、F	・ここでも旧訳では「字」、新訳では「ことば」である。 ・カイが解放されることについて、旧訳では「体」についてのみの言及だが、新訳では「自由になれる」というのが「体」だけでなく「心」も含まれている感じ。 ・旧訳では「襦袢も、世界も」と関係性がなく突拍子なかつた部分に、「あたらしい」や「のこらず」という要素が入り、なんとなく自然な形になっている。
179-9	ゲルダはカイの頬にキッスしました。	ゲルダは、カイのほおにせつぷんしました。	D	「キッス」→「せつぷん」
179-9	【すると】見る／＼※美しくなりました。※	みるみるそれは※ほおごと赤くなりました。※	A、B、F	キスされたカイの「ほお」がどうなったかが全く違う。旧訳の「美しくな」ったというのは文脈から違和感がある。
179-9	またゲルダはカイの目にもキッスしました。	それからカイの目にもせつぷんしました。	C、D	「キッス」→「せつぷん」
179-10	【それからゲルダは】カイの手だの足だのにキッスしました。	カイの手だの足だのにもせつぷんしました。	A、B、D	
179-11	これで【カイは】、もとのやうに快活になりました。	これで、しっかりしてげんきになりました。	B、C	ゲルダのキスでカイがどうなったか、新旧で微妙にニュアンスが違う。
179-12	女王がそれが出来れば許してやると言った字が、ひか／＼光る氷の文字で、立派に書かれてゐたからです。	だって、女王が、それができればゆるしてやるといったことばが、ひかひかひかる氷のもんじで、はつきりとそこにかかれていたからです。	A、C、D	・「字」→「ことば」 ・「立派に」と「はつきりと」でその文字のイメージが変わる。
179-14	それから二人は手を取り合つて、その大きな【氷の】お言から外へ出ました。	さて、そこでふたりは手を取りあつて、その大きなお城からそとへでました。	A、B、C、D	
179-15	二人が行つたところには、風も吹かず、日の光が輝いてゐました。	ふたりが行くさきさきには、風もふかず、お日さまの光がかがやきました。	C、D	・「日」→「お日さま」 ・「お日さまの光」は、旧訳ですすでに輝いていて、新訳ではゲルダとカイが行くと輝き出すように取れる。
179-16	(略)あの藪のある所に來た時、そこに【は】馴鹿が二人を持つてゐました。	(略)あの木やぶのあるところに来たとき、そこにもう、となかいがいて、ふた리를まつていました。	A、B、D	
180-1	その馴鹿はもう一匹の若い馴鹿を連れて【來て】ゐましたがその若い方は、子供達に暖かい乳を與へ、口の上にキッスをしました。	そのとなかいは、もう一びきのわかいとなかいはつれていました。そしてこのわかいほうは、ふくれた乳がさからふたりのこどもたちへ、あたたかいおちちを出してのませてくれて、そのくちの上にせつぷんしました。	A、B、C、 D、E	・となかいはゲルダとカイに乳を飲ませるシーンが新訳でより詳しく書かれている。 ・「キッス」→「せつぷん」
180-8	馴鹿と、もう一匹の馴鹿とは、二人のそばについて、園境まで來てくれました。	となかいは、もう一びきのとなかいはとは、それなり、ふたりのそりについて、はじめて、園境までおくつてきてくれました。	A、D	
180-9	そこでは初めて、【若草】※が芽を出してゐました。	そこでは、はじめて草の緑※が※もえだしてゐました。	A、B、C、 D、F	・新訳は「草の緑か」となっているがおそらく誤字で、正しくは「が」であると思われる。
180-9	カイとゲルダは、そこで二匹の馴鹿と、ラップランドの女に別れました。	カイとゲルダとは、そこで、二ひきのとなかいはと、ラップランドの女どにわかれしました。	A、C、D	
180-11	「さやうなら。」とみんなはいひました。	(改行)「さやうなら。」と、みんなはいひました。	A	新訳では別れの言葉が改行されて強調されている。
180-11	森には蒼々とした草の芽が一杯にふいてゐました。	森には、緑の草の芽が、いっぱいふいてゐました。	A、C	
180-13	その森の※外には※、美しい馬に乗つた若い娘が、赤いひか／＼する帽子をかぶり、鞍にピストルを二挺つけて、こちらにやつて來ました。	その森の※中から※、うつくしい馬にのつた、わかいむすめが、赤いひかひかするぼうしをかぶり、くらにピストルを二ちようさして、こちらにやつてきました。	C、F	このむすめが出てくる場所が、旧訳では「森の外」、新訳では「森の中(から)」と違っていて、ともするとゲルダたちの現在地も違うようにも取れる。

180-14	ゲルダはその馬を知つてみました。それはゲルダの金の馬車を引つ張つた馬であつたからです。	ゲルダはその馬をしていました。(それは、ゲルダの金の馬車をひっぱつた馬であつたからです。)	A	ゲルダが馬を知っていた理由が、新訳では()で書かれている。他にはない表現でめずらしい。
180-15	そして、この娘は追刺の娘でした。	そして、このむすめは、 <u>れいのおいはぎのこむすめ</u> でした。	A、D	
181-1	そしてもし北の國が氣に入らなかつた【な】ら、(略)	そしてもし、北の國が氣に入らなかつたら、(略)	B	
181-4	「【もし】、 <u>あなた</u> 【は】、ぶらつき屋の天才ですね。一體あなた【など】のために、世界の果まで捜しに行つてやるだけの値うちがあるかどうか、知りた位ですわ。と <u>その娘はカイにいひました。</u> 」	「おまえさん、ぶらつき屋のほうでは、たいしたおやぶんさんだよ。」と、 <u>そのむすめは、カイにいひました。</u> 「おまえさんのために、世界のはてまでもさがしにいってやるだけのねうちが、 <u>いったい、あつたのから。</u> 」	A、B、C、D、E	むすめの話し方はやはり、全体的に旧訳は品のある感じ、新訳は下品な感じである。「あなた」と「おまえさん」、「天才」と「おやぶんさん」といった使う単語の違いや、言葉の違いの違いが「むすめ」像に大きく影響しているといえる。
181-7	けれどもゲルダはその娘の頬を軽く※打ちながら※、王子と王女とはどうなつたかと尋ねました。	けれども、ゲルダは、そのむすめのほおを、かるく※さすりながら※、王子と王女とは、 <u>あののちどうなつたとききました。</u>	A、C、F	ゲルダはむすめのほおを、旧訳では「打ち」、新訳では「さす」っている。どちらかは誤訳か。
181-9	「あの人は外国へ行つてしまひました。」と追刺の娘が答へました。	「あの人は、外国へいつてしまつたのさ。」と、おいはぎのこむすめがこたへました。	A、C、D	
181-10	「けれども、鳥はどうして。」(略)	「それで、からずはどうして。」(略)	C	
181-11	「まあ、鳥は死んでしまひましたよ。靴の鳥は、やもめになつて、【片方の】 <u>足に、黒い手糸の草鞋</u> をつけて、【大へん怨めしうに、】 <u>泣言</u> を言つてゐるとの話ですが、【でも、それは】噂だけでせう。こんどは【あなたが、】どんな旅をしたか、(略)話して下さいな。」と娘がいひました。	「ああ、からずは死んでしまつたよ。」と、 <u>むすめがいひました。</u> 「それで、 <u>おかみさんがらすま</u> 、やもめになつて、 <u>黒い手糸の草鞋を足につけて</u> ね、 <u>ないてばかり</u> いるつていうけれど、うわさだけだらう。さあ、こんどは、 <u>あれからどんな旅をしたか、(略)話しておくね。</u> 」	A、B、C、D、E	・他と同じ言葉違いが大きく違う。 ・旧訳の踵のからずは「大へん怨めしうに」しているところがある、新訳では「怨めしい」という要素はなくなり、ただ「ないてばかりいる」となっている。
181-15	そこで、カイとゲルダは、※二人の語※を聞かせてやりました。	そこで、カイとゲルダとは、 <u>かわりあつて、※のこらすの語※をしました。</u>	A、C、F	何の話か、表現が違っている。
181-16	「※手つとりばやくさ。※」と追刺の娘が申しました。	「※そこで、よろしく、ちんがらもんがからか、でも、まあうまいつて、よかつたわ。※」と、 <u>むすめはいいました。</u>	C、D、F	訳が全く違っているのは底本の違いによるものか。旧訳の「手つとりばやく」とは何のことを指しているのか。
182-2	そして、【その娘は】二人の手を取つて、(略)きつと【二人を】訪ねようと約束しました。	そして、ふたりの手をとつて、(略)きつとすねようと、やくそくしました。	A、B	
182-4	それから娘は馬を急がせて、どことも知らず出て行きました。	それから、むすめは馬をどばして、ひろい世界へでて行きました。	A、C	
182-5	でも、カイとゲルダとは手をとりあつて進んで行きました。	でも、カイとゲルダとは、手をとりあつて、 <u>あゝ</u> いっていきました。	A、C	
182-7	【二人は行けば】行くほど、【段々】そこらが(略)	いくほど、そこらが(略)	B	
182-8	お寺の鐘が聞えて、【二人は尖つた】高い塔と、大きな町が見えて來ました。	お寺の鐘がきこえて、 <u>おなじみ</u> の高い塔と、大きな町が見えてきました。	A、B	
182-11	そこで二人は、 <u>おばあさん</u> のところへ行つて、 <u>梯子段</u> をあがつて、 <u>部屋</u> へはいりました。	そこでふたりは、 <u>おばあさま</u> の家の戸口へいつて、 <u>かいだん</u> をあがつて、 <u>へや</u> へはいりました。	D	「おばあさん」→「おばあさま」
182-13	そこでは何もかも、 <u>いつとも變つては居りません</u> でした。	そこではなにもかも、 <u>せんとかわつて</u> いせんでした。	C	
182-14	【大きな】柱時計は、【カチカチと時を刻んで、針は廻つてをりました。」	柱どけいは「 <u>カッチカッチン</u> 」いって、針がまわつていました。	A、B、C	柱どけいの音が、旧訳の方が早く、新訳の方が遅そうである。新訳では「」で書かれ、実際に音が鳴っているかのようにである。
182-15	けれども【二人は】、※いくつもの部屋を通りぬけた時※、自分達がもう大人になつてゐることに気がつきました。	けれど、※その戸口をはいるとき※、 <u>じぶんたち</u> が、いつかもうおとなになつてゐることに気がつきました。	A、B、C、F	「自分たちが大人になつたことについて気付くか」が違っている。旧訳では「いくつもの部屋」とあるので家の中での複数の移動を通して、新訳では「その戸口を」とあるので一瞬のタイミングであるよう。
183-2	カイとゲルダは、(略)	カイとゲルダとは、(略)	A	

183・3	二人はもう、※重苦しい夢のやうな雪の女王のお宮の、寒い、がらんとした荘厳さを忘れてしまいました。※	ふたりはもう、※あの雪の女王のお城のさむい、がらんとした、そうごんなげしきを、ただぼんやりと、おもくらしい夢のようにおもっていました。※	A、D、F	「雪の女王のお城の景色」について二人は、旧訳ではすでに「忘れてしま」い、新訳では「おもくらしい夢のようにおもって」いる。「おもくらしい夢のよう」という部分のかかる語の違いなので、どちらかが誤訳だと思われるが、文脈としては新訳の方が自然であろう。
183・5	おばあさんは、神さまのうららかな日の光を浴びて、「爾曹、もし、嬰兒の如くならずば、天国に入ることを得じ。」と、高らかに、聖書の一節を讀んでおました。	おばあさまは、神さまの、うららかなお日さまの光をあびながら、「なんじら、もし、おさなごのごとくならずば、天国にいることをえじ。」と、高らかに聖書の一せつをよんでおました。	A、C、D	「日」→「お日さま」
183・8	そして【すぐに】、 (3字下)※うつくしきばらはたのし。 (3字下)イエスのめぐみはさらたのし。※ といふ讚美歌の意味を知ることが出来ました。	そして、 (一行空き) (3字下)※ばらははな さきてはちりぬ (3字下)おさな子エスやがてあおがん※ (一行空き) というさんび歌のいみが、にわかにはっきりとわかってきました。	A、B、C、F	・讚美歌の書き方は先のものと同じ。 ・讚美歌の意味について、旧訳では「知ることが出来」た、新訳では「はっきりとわかってき」たとあり、「知る」のと「わかる」ので微妙にニュアンスが違う。
183・14	そこで二人は、體こそ大きくなつてもやはり子供で、心だけは子供のまゝで腰をかけておました。	こうしてふたりは、からだこそ大きくなつても、やはりこどもで、心だけはこどものままで、そこにこしをかけておました。	A、C	
183・16	【それは、】ちやうど夏でした。暖い、喜ばしい夏でした。	(改行)ちやうど夏でした。あたたかい、みめぐみあふれる夏でした。	A、B、C	「どんな夏か」が違っている。新訳の「みめぐみあふれる」はキリスト教的であるが、原本では宗教用語が使われているのだろうか。